

タイ通信 ― サワディカップ ―

櫻井 義秀

はじめに

本稿は、筆者が一九九〇年九月から一九九一年三月にかけて、タイ国国外研修の際、バンコクから北星女子短期大学学生にタイ通信として一三回にわたり送ったものである。学生諸君に少しでもアジアへの関心を持ってもらいたいという気持ちからと言えば、格好のつけすぎで、半年間、ゼミ生をほったらかしにしてしまう罪悪感を何とか解消しようと、ゼミ生及び私の社会学講義を受けた学生に、ほぼ毎週書き送った。また、山本教授が以前タイから学生指導ができるのでは言われたことも念頭にあった。しかし、指導には到底至らず、自分自身のアジア観・日本の現状認識を確立するので精一杯だったといえる。

書き始めた当初、学生へのタイ紹介のつもりであったが、いつのまにか私自身のタイ認識を記録するものになり、最後には自らの日本観を修正することになった。私の場合タイに特定化しているが、アジアを研究することで日本の像がより鮮明に浮かび上がってくるのではないかと思われる。これは比較社会・文化学のレベルではもとより、実際に現代のアジア社会は日本の経済力の支配下にあるし、アセアン諸国の近代化・産業化に伴って生じてきた社会問題も、元を辿れば日本に行き着くことが多い。従って、高度経済成長期以降の日本経済のあり方を振り返らされることしばしばあった。私のタイ滞在半分の成果は、日本の経済発展の過程をアジアの視点からもう一度捉え直してみようという意識を持つに至ったことである。

近年、欧米から開発教育という領域が日本に紹介され、実践しているNGOも増えている。もちろん、発展途

上国が用いる開発教育と先進国が用いる開発教育とは意味が違ふ。前者は、文字通り地域の人々の生活向上のために、いかに産業を起こし育てていくかという視点である。後者は、いかなる国家も今日資本主義の世界市場に巻き込まれざるを得ないということを前提に、途上国が先進国の経済に從属している現状を打開する方法を探り、対等な国際関係を築くための先進国の人々に向けた準備教育とでも言うべきものである。前者が先進国の開発観で、後者が発展途上国と呼ばれる国家で生まれた視点であるのはいささか皮肉である。しかし、完全な自由経済体制において先進国と発展途上国の格差が温存される以上、垂直分業的な国際関係のあり方に異議を唱えるのは当然であつたといえる。現に、先進国が途上国に対し、開発援助として資金の融資その他を行なつても、結果として、主たる輸出品が安値で取引される一次産品や軽工業製品で、開発のための技術・資財は外国に依存せざるを得ない状態の多くの途上国では、輸入超過と対外債務の利払いで国内経済がますます悪化しているのである。先進国側は自身の国外投資の安定を図るために、さらに開発援助を続けざるを得ず、途上国側はその援助を前提に国家予算を設定するといった、從属型の経済を抜け出せずにいる。ともあれ、開発教育に関しては、今後検討することとし、ひとまず発展途上国と呼ばれる国の様子を知ることから始めたいと思う。

最後に、今回のタイ国での研究機会を得ることができたのは、北星学園女子短期大学の教職員の方々の理解と尽力による。とりわけ、タイからの通信物の取り扱い、掲示等では、教務課長の安田順助氏（現事務局長）、教務係の松本孝子氏にお世話頂いた。また、タイで調査中ということもあり、紀要原稿の校正その他で、紀要委員の寺岡教授・蓮池教授・クリステンセン助教授・清瀬助教授の諸先生に御面倒をおかけした。記して、感謝致します。

一、一九九〇年九月一日 喧騒のバンコク

北星学園女子短期大学の学生の皆様におかれましては、御壮健にて勉学に励んでいらっしゃるものと存じますが、いかがなものでしょうか。ここバンコクは、タイ人に言わせると涼しくなったといながら、日中三〇度を超え、加えて多湿、車の爆音と排気ガスを浴びせられながら、街を歩けば目眩もしてこようというものです。戸籍のない人を含めれば人口五〇〇万とも六〇〇万ともいわれるバンコクには、交通手段が車しかありません。時間規制・一方通行いろいろやっていますが、常時混雑、通勤時にはものすごい渋滞になります。歩いたほうがはるかに早い場合が多いのですが、なにせこの暑さ、タイ人はちよつとの距離でもバスに乗ります。実際、片側三車線の目抜き通りは、排気ガスで紫色にかすみ、そこをバス・車が疾走し、その間をぬってバイクが走り、交差点でも日本のつもりで車が歩行者を優先してくれるつもりでいたら、いくら命があってもたけません。市街で自転車を殆ど見かけないのも、危ないからなのでしょう。まず、歩く気になれません。

さて、主たる交通手段のバスですが、市内定額で二バーツ、一二円です。新型が三バーツ、エアコン付きが五バーツです。庶民は、窓・ドア開けっぱなしの安い方を利用しているようです。これは、止まっていれば乗り降り自由で、交差点で止まるのを待っていても乗れます。また、バスが完全に停止してから降りてくださいなんて悠長なことではなく、止まらずに徐行して客を出し入れするバスも珍しくありません。急ブレーキも常時で、バス同士で競争して黒煙をあげてダッシュすることもあります。この運転ですから事故も結構あり、日本人向けの週刊バンコクという新聞に、追突横転して死傷者二〇数名を出した記事がありました。「助かった運転手が、例のごとく逃げだそうとしてまわりの人間に取り押さえられた」というくだりは、偏見もあれ、妙に納得できてしまいます。料金は筒型の入れ物をカチャカチャさせて、どんなに混んでいても車掌が集めにきます。

バス以外の乗り物として特筆すべきは、日本にはないトゥクトゥクという軽三輪。バイクの後輪を二つにして

幌をつけたようなしるもので、後に三人乗れます。これがまたとばし、道路の穴にはまって横転して客が投げ出されるといふ話も聞きます。料金は運ちゃんとの交渉次第です。距離、時間帯、天候、外国人でもタイ語で交渉してくるかなどの要素を考慮して、高めの値段をふっかけてくるので、値切りにかかります。観光客であれば、タイ人の倍は出しているでしょう。折り合わなくて、もういいという素振りをする、じゃ安くするから乗ってくれということもあり、多少の掛け引きは必要です。運賃が決まったところで、後は何時間かろうと乗ってだけです。タクシーも同じで、客がドアを開けて交渉します。メーターに慣れた日本人には毎回の交渉は煩わしいかもしれませんが、価格は需要と供給の折り合ったところで決定されるという市場のメカニズムが肌で感じられて面白いかもしれません。

今回は、市内の足について話しましたが、次回はバンコクの住宅事情を若干紹介しましょう。私、未だにダウンタウンの安ホテルに仮住居してますが、交通事情もさることながら、アパートを見つけたのが大変なのです。

二、九月二五日　バンコクの住宅事情

前号で突如登場した「サワディ カップ」なる名前に戸惑われた人もいたかもしれません。タイで「おはよう・こんにちは・こんばんわ・さようなら」に相当する万能的挨拶の言葉です。さわやかサワデーのあれです。もっとも、普通のタイのトイレに芳香剤は置いてないし、買うと日本と同じくらいする。日常生活用品でないものは非常に高価です。

それはそうと、窓の外は雨。タイは六月から十一月くらいまで雨季、十二月から二月まで寒季、三月から五月頃までの暑季に分かれ、現在は一年で最も雨の多い時期のようです。雨季といっても、日本の梅雨と違い、夏の入道雲の空がにわかには暗くなり、激しい雷を伴うどしゃぶりが二、三日に一度ある程度です。タイ人はまず傘を持ちません。止むのを軒下で待つか、店で時間をつぶすかしています。傘をさしても地面からはねかえった雨で

服がびしゃびしゃになるので、さしてもささなくてもたいした差はないのです。この時期はサンダルばきに限ります。

さて、外国人からみたタイの住宅事情ですが、現在供給不足が深刻でホテル代・コンドミニアムの家賃はうなぎのぼりです。タイでは、一九五〇年代に国家主導型の経済政策が軍・官僚の天下り会社濫発により失敗し、世界銀行の勧告を受けて外資導入による開発経済を指向するようになります。一九六〇年代は、アメリカにベトナムへの戦略基地を提供した見返りとしてアメリカ資本が、次いで日本の経済援助(ODA)と、民間企業の進出により、一九八〇年代にタイは韓国・台湾・香港・シンガポールに次ぐ、第五番目のNICs(新興工業地域)に位置するほど、経済成長を遂げています。現在、バンコクにはかなりの外国人が滞在し、経済活動に従事しているわけですが、急激に増えた外国人に対して、外国人向けのアパートメント、オフィス用ビルの供給が間に合わず、賃貸料が上がっているのです。もちろん、地価の上昇がこれに先行しており、ある調査によれば、今年だけで二倍にはねあがった地区もあるのです。私の居住する地区では、一九八六年から一九九〇年六月までに二四四%上昇しています。

私が今回タイに来て一番驚いたのがホテル代の値上げでした。昨年三五〇バーツで泊まれた中級格安スリクルンホテルが五〇〇バーツ(約三千円)に値上げしているのを始め、月額一万バーツ程度(約六万円)のアパートメントがゲストハウス程度(トイレ・温水シャワー付きのペンションといったところ)に落ちています。札幌でなら月六、七万円です。およそ、信じられない、でも、ほんと、事実です。但し、これは都心部の話で、郊外に出ればもっと安いでしょう。しかし、公共交通機関がバス(強いて付け加えればチャオプラヤ川沿いの船)しかないこの都市で、朝夕のラッシュアワー時に都心で車が動く距離は、よくて一時間で二km。郊外に住む人は、朝の六時に家を出てくる人も珍しくないのです。この話どこかで聞いたことがある? そう、東京です。もちろん、

東京には地下鉄・私鉄・JRがあるので、三千万規模の人口圏でいられるわけです。住宅・通勤事情は東京と非常に似ている。というより、日本の資本がミニ東京をここに作り出そうとしているような気がしています。

三、一〇月六日 味噌汁のはなし

今週はモンスーンの直撃を受け、水曜日から三日連続して雨が降り続き、市内の至る所で冠水したようです。屋台のオジサン・オバサンたちは商売あがったりです。ちなみに、雨が降ると市内の交通はスムーズに流れます。バイクが減ると、外出を見合わせたり、雨宿りで時間をつぶす人が増えるからでしょう。雨で遅れるのは正当な理由なのです。

ところで、前号を出してから二週間のブランクは、妻が食あたりで寝込んでしまったからなのです。もともと風邪で体調が悪かったので、日本料理でも食べて元氣を出してもらおうと、ホテルの向かいの東急デパート「田ごと」で、巻き寿司とてんぷら、焼きなすをとりました。ところが、あさりの味噌汁がどうもよくなかったらしい。加えて、東急マーケットで買った、賞味期限を半年も過ぎたしじみの生味噌パックにもあたったらしいのです。これは具合が悪くなってから気づいたこと。さっそくクレームをつけに行き、どうしてくれると支店長らしき日本人に口上を述べたところ、恐縮して謝罪され、殷懃にタイの事情の説明を受けました。久しぶりに日本人らしい対応にあつて、かえってこちらがびっくりし、というのも、タイでは普通まず謝らない。謝ったとしても日本人ほど深刻になりません。そして、謝られたほうも「マイペンライ」（いいですよ）で済んでしまう。待ち合わせの時間も一、二時間のズレはマイペンライの範囲のようです。このマイペンライについては、次回に回します。

タイの事情ですが、なまものは検疫で輸入禁止なのです。ですから、長野のはちょう味噌や水戸の納豆などが冷蔵ケースに存在してはいけなはずなのですが、マイペンライの保健所(?)と「運びや」と称する人

たちのお陰で、日本食を懐かしむ人たち（私も含めて）が、高価な味噌汁を飲めるわけです。キッコーマンの赤だし三杯分が、約四百円、タイではラーメン六杯分の値段に相当します。これだけ高くて、しかも返品（日本の問屋へ）のきかない商品となれば、期限切れでも捨てられないということらしいのです。東急の人も、知っていつ自分も飲んでいいるということでした。

さて、事情を説明されても、腹が治るわけでなし、金持ちのタイ人及び外国人専用の私立病院に行きました。この病院、待合室でビデオを観ながら、お茶のサービスを受け、患者一人に看護婦さんか事務員が一人付き添ってくれるきめの細かさ。医者に英語で書いた症状を持参したら、いきなり「すいべんですか」といわれビックリ。「軽い食あたりです。パンとスープとスプライトを飲みなさい。」スプライト、スポーツドリンクの代わりでしょう。薬をもらって、五百バーツなり。保険をきかせないで、三千円は日本の感覚では安いのですが、中卒くらいの住み込み従業員の月給の三分の一、普通の人がいかないわけです。この病院は日本に留学した医者が五、六人いるそうです。Bumrungrad Hospital 住所：Sukhumvit Soi 3 Bangkok は、ICUの設備も備え、頼りになります。今は、全快し、週末はアユタヤ見物（アユタヤ王朝時代のタイの首都、十七世紀の初期山田長政などの日本人八千人が住んでいたといわれる。クメール風の仏教遺跡群）に行ってきました。新聞では、最高気温三度になっていますが、体が慣れたせいとか、それほど感じなくなりました。

四、一〇月一四日 マイベンライ

今週末は、タイ語の先生と学生五名でパタヤビーチに泊まりがけで行って来ました。最初、土曜日に昼飯と一緒に食べる計画だけだったのが、食べた後どうしようと考え、ビールの酔いも手伝っていっそパタヤへ、と決まったのでした。学生時代を彷彿させる行動パターンですが、こういう柔軟性はタイらしくていい。この柔軟性はいろんなところで発揮されます。前回は人待ちの時間に触れましたが、皆が皆一、二時間は「マイベンライ（氣に

しないで」で済ませるわけではなく、三十分遅れるので電話するという律儀な人もいます。

ところで、タイで日常生活をする際、こういった柔軟な面（時間・言葉）を考慮しておかないと、精神衛生上よろしくないことが多々あります。私は日本では結構気の長い方だったのですが、こちらでは「怒りっぽい」部類に入れられてしまっています。五〇分位のタイ語の授業（個人授業）で先生が一〇分ほどしばしば遅れてくるので、こちらばかりカリカリしていると「何で怒っているのか」と怪訝に思われ、そのくらいは「マイペンライ」とタイ人はいいますよと教えられる始末。実際、タイ人も腹を立てつつ「マイペンライ」ということも多いようですが。

また、エージェントなどにものを頼んだ際、気をつけなければいけないことは、「できる」という言葉は、「その通りやります」とは違ふのだという点です。「できる」という判断は個人がその時点でたまたまそう思ったということであって、組織内外の対応・手続きを含めて「できる」と言っているのではないのです。ですから、できるといったのにやってくれないなんてことはしょっちゅう起こります。しかも、責任は個人ではなく、組織に属してしまうので追求のしようがない。その人の権限に属さないことで「できる」と言われても、「やる」の言葉を聞くまで安心できないのです。しかも、タイでは、買物の交渉でこれ以上安くできないという以外は、「できない」とはっきり言わないのでやっかいでもあります。まあ、こう書くとタイの人は厳密でない、あまり信用できないのかという見方になってしまいますが、そうではなく、いやとさえない気の下さを受け取ったほうがいいでしょう。当事者としては、非常に腹が立つし、特に日本企業の人には口約束は一切当てにせず、全て書類で確認をとると言っていますが。

逆に、日本人が本心に厳密に約束を守り、言葉通りのことをするかというところでない例はいくらでもあるでしょう。国会答弁で多用される「前向きな姿勢で善処したい」「遺憾である」。或いは、太平洋戦争のアジアに対する戦争責任の問題では、閣僚の暴言・失言を待つまでもなく、庶民も忘れやすいし、被害者意識の方が先行しているのも事実です。日本では形としての正確さ、慇懃さ、「恐縮」が強調されます。形と実質（中身）のズレ

はよくあることですし、国際政治もまた然りですが、文化の型を以てこの国の人はこうだと断言するのは軽率です。国民性の議論は、多様な側面と時間の幅を考慮に入れないと一面的なものになるでしょう。まあ、これも日本人、教師稼業のタテマエ優先のセリフでして、この通信も殆ど印象記の域を出ていないのが実際のところですよ。

五、 一〇月二日 ゴルフ

季節の変わり目を街を歩く人の服で知るのには、やはり温帯気候なのでしょう。私は毎日半袖のワイシャツにスラックス、サンダルばきに帽子ですが、他の人もワンパターンで面白くありません。でも、服に金がかからない。露店で売っているTシャツは二百円からあるし、男でいくら服に凝ったとしても、せいぜい高めのワイシャツにネクタイをするくらい。このネクタイの習慣は外国の商社マンとエアコンによりもたらされたもので、日本人はさらに背広まで着込んでいるのですぐ分かります。全くこちらの気候に合わないしろものです。

もう一つ日本が持ち込んだ悪習が、ゴルフでの接待・会談です。今月一五日のニューズウィークにも出てましたが、バンコクは空前のゴルフブームになっています。もちろん、スポーツとしてのゴルフではない、日本式ゴルフ。最初にステイタスシンボル、仕事上の必要悪、会員権の売買、日本でも問題になっている農地の転用です。から打ちの練習場も国道沿いに出来ています。日中三〇度を超す強い日差しと、むうつとした空気のなかでプレーして心地よいかどうか。年中青青としているこの土地で雑草を取り除くためにどのくらい農業を使わなければならないのか。仮にゴルフ場で土地を売却した農民を全て雇用し、同程度の年収を保証したとして、このような産業に従事する人を増やすのと農業生産物を豊富に確保しておくのと、どちらが国のためになるのか、議論はそう簡単ではないでしょう。特に、ゴルフの会員権を転売することで吊り上げ、投資の対象にする手口は日本直輸入で、日本人向けの経済誌に毎回広告が載っています。バンコク近郊の土地もそうですが、ここ一、二年で二倍から三倍に上がっているようです。

さて、普通の人はおそらくゴルフ、スポーツにさえ、縁のない生活を送っています。スポーツ店で売られるジョギングシューズは、その店員の月収の四分の一近くします。こちらでは生活必需品、例えば米など五キロ三百円と安いのですが、奢侈品は日本並で、車は日本の約二倍（五年ものカローラ中古が百万じゃ買えない）です。普通の公務員で月収がおよそ二万四千元、かなりいいところの民間企業に努めても六万円がせいぜいのサラリーマンに贅沢は出来ません。結婚前の若い人は、一部屋に何人も住んで家賃を浮かせたりするのが普通のようなのです。また、部屋を借りて住める人はいい方で、ホテルや店に住み込みで働いている人の月収は一万円弱。これは物価も賃金も高いバンコクの話で、地方では一日出面（農作業の手伝い）で三百円にもならないのです。このような低賃金で勤勉に働く国民を外国企業がほっとくはずはなく、数百の日本企業が既に進出し、さらに会社の設立のために日本から派遣された人、会社設立の代行屋など、人口およそ二万の日本人租界をつくっています。他方、金持ちもまたそれなりにいて、ベンツの運転手付きでYMCAのプールに水泳を習いにくるガキがいるかと思えば、その隣の工事現場で同年輩の子供が学校にも行けずに働いているという階層差が随所で見られます。かつて数十年前に日本が経験した光景ですが、この底辺を利用する階級（日本人も含めて）が、タイ社会の底上げに非協力的である以上、なかなか階層差は縮まらないでしょう。

六、一〇月二八日 子供村学園

今週末は、太平洋戦争末期、日本軍が軍需物資移送のために建設した、ビルマとタイを結ぶ泰緬鉄道（約四〇〇km）が通るクワイ川鉄橋（「クワイ川マーチ」「戦場にかける橋」で有名）があるカンチャナブリ（バンコクの西一三〇km）にある「子供村」に行ってきました。これは一九七九年に設立された寄宿制の私立小学校で、タイ各地から孤児、虐待された子供（暴力・強姦）をあずかり、独特な学習法と農作業・工芸を通し、生活力を身に付けさせ果立たせています。A・S・ニールのサマーヒル学園の思想と仏教の性善説的発想を合わせ、教育と

いう名の大人の權威を一切子供に押し付けない、自発性の尊重を基本としたフリースクール（勉強するかしないかは子供が決める、したくないときは遊んでもよい）をタイで実践しているユニークな学校です。

タイでは、百数十万人もの一五才以下の児童が労働市場に組み込まれており、その半分以上は農業ですが、近年建設・軽工業部門で働く子供の数が急増しています。その原因は、資本主義経済の農村部への浸透によって、現金を必要とする農家（日用品・テレビ等の耐久消費財購入）が、自給自足的な米の生産だけではやっていけなくなり、子供達の都市での稼ぎに頼るようになってきたこと。その子供の安価な労働力を利用して、安い下請け製品をタイの小さな工場で作るようになってきたこと。それらの部品が日系企業の製品の一部になって、知らず知らずのうちに日本に入ってきているわけですが。こういった一連の工業化の過程で生み出されたのが、子供の労働者です。これはタイに限らず、二百年前のイギリスの炭坑、百年前の日本の女工哀史など、産業化の最初に起きる現象ですが、タイでは今がそうなのです。もちろん、中等教育以上を十分受けられる子供もいますが、大半は小学校卒業がせいぜい。モラトリウムが長い日本では想像もつきませんが、子供は可愛がられるだけ、甘やかされるだけの存在ではなく、大半の親は生活を助けてくれることを期待しているのです。また、貧困が親の間性を歪めることもあり、子供に暴力的衝動を向けるものも出てきます。そうして育った子は、同じことを次世代に行ない、この連鎖を切るのがかなり難しい。こういう状況に、相当数の子供がいるのです。

子供村の試みは百名弱の子供達だけです。母集団から考えると気の遠くなる対処療法にしかありませんが、今後のタイの子供の教育・状況改善に一石を投じたことは確かです。日本からも大勢のスタディツアーが訪れ、子供達の明るさ、旺盛な活動力・自主性に感銘を受け帰ってきます。子供村の最高議決機関は学園評議会で、子供も一票持ち、大人と同等に参加できます。いわば直接民主制のコミュニティで、「他人を罵ったものはお菓子を与えない」「陪審員の許可を得ず、蛇を退治できる」「覗き見は五日間の権利剥脱」（権利剥脱とは、お菓子・川遊び・外出・自動車に乗る・日曜のビデオ視聴のこと）など二歳から二十歳までの子供達が、公共性を尊重し

つつ権利意識を育てている生活です。この村のことを詳しく知りたい人には資料を送ります。タイとは対照的に、神戸での女子高校生校門圧殺事件に象徴される日本での教育の難しさは、豊かさが生み出し、親・教師・子供の三すくみで先が見えないだけに、ある面でタイより深刻かもしれませぬ。

七、十一月三日 日本情報

学園祭が終わり、一段と秋が深まった頃だと思います。日本では、ペルシャ湾への自衛隊派遣の立法措置をめぐる議論でもちきりのことでしょう。タイの新聞でも、宮沢元外相が今のままの憲法で派遣可能であるとコメントしたとかしないとか、この問題に関してだけ詳細な記事を載せています。英字紙の社説では、過去の日本軍覇権への懸念からかなり神経質になっていることが伺え、どのような政治的決定をするにせよ、アセアン（共産主義国を除く東南アジア諸国）への相談をしてから決めてはしかなかったと遺憾の意を述べ、日本政府に遅らばせながら顔を立ててもらったようです。これは、日本が韓国併合や満州侵略を進出と訂正させた教科書検定にクレームをつけられて、あわてて首相が弁解したおきまりのパターンですが。

タイに来て不思議に思ったことの一つは、日本企業がこれほど進出し、日本製品がちまたに溢れているにもかかわらず（ヤクルトおばさんが全く同じ格好で配達している）、日本が経済面・政治面に出ることが殆どないことです。昨年、アメリカでソニーがコロンビア映画を買収したり、三菱地所がロックフェラーセンタービルを買ったりした時に叩かれたのは、アメリカの顔を自動車に次いでぬきうちでつぶしたからでしょう。タイの場合は、日本企業の進出歴が長く、初期の一九七〇年代にはかなりの摩擦を引き起こしましたが、今はODA・企業の投資を問わず、日本の経済抜きにタイ経済が成り立たないようになっていきます。圧倒的な技術力とマーケティング力（コマースシャルを含む）で入ってこられると、それを使うしかなくなり、日本製であるかどうか関係なく、生活必需品に変わっていくのです。実際、タイではトヨタ・マツダは車の代名詞だし、バイクはホンダ・カワサキ・

ヤマハしかないので。要するに、日本人が文化侵略と意識せずに西欧指向になっているのと同様、タイでは便利な品物を消費文化をひっくり返して日本から受け取り、生活の一部としているのです。自明なことは新聞ネタになりません。但し、モノ以外の文化面で日本の影は薄いし、社会・文化的優越性を感じてはいないようです。というより、その方面には無関心。理由は簡単で、自民党閣僚のばらまき外交以外、タイ社会は日本の政治社会に関係がないのです。もっと言えば、日本は技術や製品と置き換え可能な存在であって、文化とか社会のレベルで関心の対象になっていないのです。MR. KAHUの政治的リーダーシップは、リップサービスとして期待される程度です。野郎事大に陥りやすい日本はよく認識すべきです。

実際、最近の日本に関する記事は、ヤクザと警察官の癒着に怒った大阪ドヤ街の日雇い労働者と警察官の対立が、「スラムでの暴動」と大々的に報道され、日本ではこの手の騒動とスラムは極めて少ないとの注釈が百行程度の記事で最後の二行に付されただけでした。或いは、日本人団体観光客の買売春が特集されたりで、普通の人の社会の様子は殆ど伝えられていない。新聞は事実を報道するという大義名分で、実に恣意的な記事の組み方をするものだと言えらる。私が出発してから道新にタイではエイズがすごいと記事が出て、家族が心配して妻帯者の私に注意しろと電話してくるので、認識不足・恣意性はお互い様ですが。

八、 十一月二日 学生運動

タイにも秋があり、葉が落ちる季節という意味の単語になっています。落葉するのはわずかで、青々と成長している草木が多くて、秋の感じが今一つ出ません。デパートでは、「Welcome Winter」のセール、ジャンパー・セーターの類を売っています。日中三〇度を超えているのに誰がどこで着るのかと半信半疑でしたが、今日たまたま曇り時々雨の天気で、二度度は十分あるのに肌寒く感じられました。体が暑さに慣れてしまったのです。タイ人と同じように「今日は寒いね」と挨拶してしまいました。

ところで、タイではここ二カ月ほど一部の学生運動が盛り上がっています。タイは第二次世界大戦以降基本的に軍事政權で、一九七三年から一九七六年まで三年間例外的に文民政府が成立していた時期があります。政治・労働・学生運動が盛り上がって軍事政權を引きずり降ろし、民主政治を試行錯誤していた時代です。しかし、中央（バンコク）での性急な改革は、全人口の八割方を占める農民、いわゆる庶民層の理解を得られず政局が混乱し、結局軍の介入・クーデターを招き、一九七六年一〇月六日タマサート大学では学生と武装警察隊・右翼団体との衝突で、学生死者三九名、負傷者一三七名、逮捕者三〇九四名を出しています。当時の学生運動家・オピニオンリーダー的な知識人は、ジャングルに逃れて共産主義ゲリラと連携したり（今も共産主義は非法です）、外国に逃れたりしました。一九八〇年代に入って、タイ政府の宥和政策もあり、かつての運動家は企業家や政治家として活躍したり（タイで大学生になれるのは現在ですら数%、金持ちだけです）、それを潔しとしない人は、農村開発のソーシャルワーカーになったりしています。しかし、学生運動はタイの経済成長とともに低下し、大学は金持ちの子弟が親の社会的地位を受け継ぐために入るという意味合いが強まっています。この点は日本と同じです。実際、私が籍を置いているチュラロンコン大学は、東大と学習院を掛合わせたようなところで、知力・財力・家柄が揃った学生が多く、卒業証書は王様が直々に手渡し、外車通学の学生が多い、アルバイトは家業である企業の経営など、ひと言、すごい。先生もまた、かつてそういう学生であった人が多いので、給料の割りにリッチですね。これは日本とえらく違うところ。もちろん、全く違う性格の大学もあります。

ラムカムヘーン大学は通信制・夜間、入試なしのオープン大学で、在籍学生は一五万人程。苦学生（苦学の意味を国語辞典で引いてくださいね）が多く、その分社会的関心が非常に高い。ここで活動家の学生が反政府のデモを二カ月以上続けているのです。現チャーチヤイ内閣で起きた政府関連事業に関する汚職と不透明な人事への国民の不信を代弁し、政府退陣を要求して、九人の学生がもし実現しないならば焼身自殺すると予告し、実際に一人の学生が抗議集会で自ら火を放ち死亡したのです。この過激な行動には、他の学生・労働団体が批判的で、

焼身志願者に五万バーツ三〇万円）の報酬の契約があったとか（交通事故死での保険金の相場並）、元陸軍大将チャワリットのバックがあり、自浄化できない政府へのクーデターをねらっているとかうわさはいろいろあります。保守化の中でもこういう学生がいるし、隣国ミャンマーでは反政府運動の主体になっています。

九、 十一月一九日 即位の礼

即位の礼が過激派の攪乱にもかかわらず、滞りなく済んだとの報を聞き、またもや日本中が天皇現象に巻き込まれたのかと思いました。それにしても、天照大神の子孫が百数十代の血脈を今に伝えているという神話をもとに（途中神武天皇はワニだったという伝説もある）、神がかった大芝居を国をあげてうったとは、民主権の国がきいて呆れます。天皇家は大和朝廷と名乗った単なる征服王朝の一つに過ぎず、その歴史の大半は実質的権力を持たず、貧乏公家の頭目として糊口をしのいでいただけです。歴史博物館入りしていた天皇家を歴史の表舞台に担いだのが、伊藤博文ら明治政府です。彼らは倒幕の旗頭として天皇家を利用しただけでなく、封建国家であった日本を中央集権型近代国家（絶対王政の形をとりつつ、実質は官僚・政治家、財界人が握る）に替えるために、そのカリスマ性を再び利用したのです。国家神道・家制度・教育勅語など戦後捨てられたものは、全てこの時代に捏造された、たかだか百年の歴史を持つだけです。この辺の経緯は私の社会学―家族の歴史―と、倫理学―天皇制と宗教―に詳しいので、二年生は思い出しておいってください。

話を端折れば、天皇家という極めて個人的な代替りの行事を国家的セレモニーに今更しなければならぬ理由は何だ、ということですが。理由がなくても皆がするから右習えをするのが天皇現象だとも言われています。この経済中心主義・金満国家日本の精神的支柱―アイデンティティー―がもはやこれしかなくなり、これでしか日本がまとまることが出来ないとするれば、悲しむべきことです。それは杞憂で、儀礼としてやっているだけだというなら、あの武装警官の数、天皇家の閉鎖性、宮内庁の存在はどう説明するか。繰り返しますが、天皇制が日本の象

徴・伝統であったのは、近代のほんの百年弱のこと。天皇家の行事にしても、全てが昔ながらのものではない。ちなみに、江戸時代の後期まで天皇家の葬儀は仏式でした。また、天皇の死と年号の変更を合わせたのも明治以降です。およそ、文化とか伝統といわれるものは天皇制に限らず、歴史が浅く、何らかの政治的イデオロギーを正当化するために作られることが多いのです。これは覚えておいてほしい。

ここタイの王制も戦前の天皇制に酷似し、実質的な政治の権限はないのですが、権力の最終的な正当性を付与する力をもっています。軍部のクーデターも国王の承認をとりつけないと成功しない。学校での歴史は、現王朝の正当性の確認でしかなく、小学生が王様と話す時用いる特別な敬語を練習したり、マスコミも王様の慈悲深さのキャンペーンをしょって中やっています。現国王ラマ九世プミポン殿下は、年に数十回の地方巡行をし、災害地では橋を直したり、貧民にはポケットマネーを恵んだり、国家予算特別枠で慈悲の政治をしています。権利の主張より、慈悲とお返しのがやりとりがこの国の社会関係だと主張する人類学者もいます。ともかく、王室への尊崇の念はすぐく、どこの家でもかつての日本のように国王の肖像画が飾られています。映画館やどのような催しでも必ず国家斉唱があり、起立しなければなりません。政府批判は可能でも王室はタブーです。タイに比べれば、日本ははるかに自由なものが言えます。これを羨ましがる学生も少なくないのです。

十、 一月二十九日 民間信仰

今週の日曜日は、国会議員（下院）バンコク区の補欠選挙の投票日でした。その前日の土曜日の晩、タイ日民衆交流フォーラム（これについては次の号で）の準備疲れを癒すため、研究室の人たちとビールを飲みに出たところ、どこの店も酒を出さない、売らないのです。次の日が投票日なので、酒を飲みすぎていけない人がいないように、政府が一日だけの禁酒令をこの地区に出したのです。ホテルでなら大丈夫だろうと頼んだところ、ないとのこと。向こうの席のコン・ファランが飲んでるじゃないかと、抗議及び懇願したところ、特別に出すからビー

ルビンにカバーをかけて隠して飲むようにとのこと。警察の見回りがあるのだそうです。ここまでして飲む方も飲む方ですが、お上はとにかく指導したがるようです。ちなみに、コン・ファランとは元々外国人の意味ですが、実際は西欧人のみを指し、コン・イーブンⅡ日本人、コン・チンⅡ中国人、コン・ケークⅡマレー系、インド・アラブ系の膚の色の黒い人という分類をタイ人はしているようです。日本人だけが、西欧人を外人と呼んでいるわけじゃないのです。

さて、今回はバンコクの民間宗教の話をししましょう。タイは国民の九五％が仏教徒で、残りがイスラム・キリスト教その他と、仏教が圧倒的に影響力を持ち、王様が仏教の保護者を自認する仏教国です。小学校時代から仏教の教えその他を勉強するようですが、他の宗教を信仰する人はその時間受けなくてもいいのだそうです。信教の自由を憲法が保証しているからです。僧は戒律を厳格に守る故に尊敬され、女性に隣に座することもできません。もっとも、久米の仙人まがいの覗き見で屋根から落ち骨折した坊さんもいるようですが。タイの案内書などから、大概の人はタイ、仏教国、信仰の篤い国民というイメージを持っていますが、庶民レベルの宗教はどの宗教も似たりよったりです。現世利益を頼むために功德を積むわけです。実際に、病気を治すとか、宝くじを当てるとか、効能のある、よくきく宗教に人々が向かうのは当然で、お陰もないのに続けている人はいません。

先日、バンコクの住宅街にある私設の寺院、シャーマンの所へ行ってきました。仏像・中国の仙人・ヒンズー教の神々がごちゃごちゃ祭られたところで、待つこと二時間、赤と金のタイの正装に白い布で目隠しをしたその家の主人が神懸かりになって登場します。彼は自信たっぷりというか神様の威厳で、信者の悩み・相談にのり、クメール文字の護符を信者の額に筆で書き、パリーカサンスクリットの呪文を唱えたりして、一晩中続々と訪れる信者の癒しをします。彼にはインドラ神（ヒンズー教）が降りるらしい。彼の弟子も祈禱の途中に激しく咳きこみ、床にバツタリ倒れて、急に腰を屈めて杖をつきだしたりしました。仙人が降りたらしいのです。彼は小児マヒで片手が動かない青年に、マッサージを施し治療しました。このように神懸かりになる人をシャーマン

といい、宗教の形態としてはシャーマニズムと呼んでいます。日本では青森県のイタコが有名ですが、この日に訪れた人はこの新宗教の熱心な信者ですが、普段は仏教を信仰し、冠婚葬祭はお坊さんを頼んでいます。生活文化としての宗教と、特殊な問題解決（病氣直し、相談等々）の手段としての宗教をうまく使い分けている様は、日本の宗教意識とそう違いはないようです。

十一、一二月六日 タイ日民衆交流フォーラム

今週末はタイの東北部コンケーンの農村に一泊し、シルク祭りを見物して来ました。内陸で高原上の地形なので、日中は半袖、朝晩はジャンパーと寒暖の差が厳しい所です。今は稲刈の時期ですが、タイでは乾期でしかも日中は結構温度が高いことから、田植え・稲刈等の時期は柔軟性に富んでいるようで、青々とした田もありました。殆どが鎌で刈って、束ねて運んで天日で乾かし、籾すりから脱穀まで手作業です。裕福な農家が、トラクターやコンバインを持っていることもありますが、地方で何軒あるかといったところです。シルク祭りは十日間に亘って行なわれ、出店や毎晩のショーが盛大に行なわれています。タイシルクは結構有名ですが、東北の農家ではカイクを置き、生糸を紡いでいます。日本で生糸を取った後のさなぎは食べなかったと思いますが、露天で煮て売っています。賞味したところ、煮豆を食ったようでそうまいという程ではありません。その他、体長一〇センチ位のコオロギを揚げたり、昆虫も蛋白源として食べているようです。

さて、先回言いかけましたタイ日民衆交流フォーラムは、政府・民間（会社間の）レベルの交流では友人・隣人としての交流が十分出来ないため、市民運動・ボランティア活動のリーダー又は一般市民レベルでの交流の機会を増やしていくために作られました。日本人がタイ人というと、工事現場などで働く外国人労働者、或いは風俗産業で働くジャバユキさんをイメージするように、タイ人も日本人はビジネスマン・金持ち・パンコクの夜を楽しみにくる旅行者といった非常に偏った見方しかしていません。というか、お互いに普通の人に出会う機会がな

いのです。また、タイ人も日本人も外国語が苦手で、まず普通の人はジュスチャー以外に意志疎通の手段を持ちません。また、旅行者同志の話を外国人と出来ても、生活している人と話すのはホームステイ等の特別な滞在の仕方を除いて、実際非常に難しく、なかなか出来ません。これは誰かが音頭をとってやれるものではなく、個人レベルで解消するしか方法がないのですが、せめて両国の実際の姿をよく知ろうということでフォーラムが結成されたわけです。テーマ部会では、日本のODAの現状とその功罪、日本でのタイ人の就労問題、バンコクの女性の売春の問題など選ばれ議論されました。

準備その他関わって得た感想は、両国間の政治意識の差と対等な付き合いの困難さです。日本では言論のレベルにおいて、天皇制の存続まで含めたあらゆる議論が可能ですが、タイでは時の政府の政策を批判できても体制そのものを問題にすることはタブーです。タイの政治も日本の政治に似ていて、政治の決定は財界と官僚・政治家で決定され、政権も派閥間のたらい回しです。だから、ある派閥の政治を非難することはよくあります。外国人労働者の問題、売春の問題。これらは、日本人の差別とか男性の女性蔑視の意識とか、或いは日本の入国管理法のレベルで議論されるし、タイ人はそのように議論したがるのですが、本当はタイにおける富の分配の不等等という基本的な問題の解決抜きに出来ないのです。しかし、これは慈悲の政治である王政をも論議の対象とするし、タイ側でフォーラム参加する人々自体中流から上流階層であるので、この問題には踏み込まないわけです。一部の中上層は、大半の下層に近い労働者の存在なしに今の生活レベルを保てないのです。

十二、 一九九二年一月二三日 マレーシア

サワッディーピーマイノ 新年おめでとうございます。

一カ月のご無沙汰でしたが、その間私はマレーシアに二週間、タイ東北部と北部を二週間程、視察という名のその実旅行をしてきました。今回はマレーシアの印象を二、三書いてみたいと思います。ペナン・クアラルンプー

ル・コタキナバルの三都市を訪れました。マレーシアは、イスラム教が公式の宗教で、宗教的指導者であり、かつての藩主国の領主でもあるスルタンと呼ばれる人たちが互選した国王をいただく国です。そのため、モスク等の建築物、女性のチャドルなどイスラム色濃厚です。ただ、アラブ諸国ほど厳格ではないようで、チャドルも顔を隠さないし、色とりどりで、女性がかなり仕事をやっています。

しかし、他宗教と比べればはるかに戒律は厳しく、一日五回の祈りはどこでもやるようです。私はマレーシアから帰る際、国際列車に乗ったのですが、同じ車両の大半がイスラムで、一旦彼らがコーランを唱え、床にカーペットをひいて礼拝を始めるともう全員通行止め、終わるのを待つだけです。食事も豚はもちろん、イスラム以外の人間が調理したものは食べられないそうなので、全て弁当持参。禁酒。私が夕食にビールを飲むのを羨ましそうに見ていました。誰も見ていなければ、飲むのかもしれませんが。イスラム教は個人の信仰ではなく、社会の宗教、生活の宗教ですから、戒律を同胞の面前で守るといのが非常に大切なのです。年に一度一ヵ月ラマダンの月は、日没まで断食・断水を守らなければならないそうですが、ある高校の校長先生が中華料理屋でラーメンを食べているところを、一種の宗教警察（イスラム教徒が戒律を守っているかどうか見回っている）に見つかり、即刻首になったと、友人が話していました。

イスラムと並んで、大きな文化的影響を与えたのが、イギリスの植民地支配です。コロニアル風の建物が多いし、何といっても英語が通じる。ちなみに、マレー語の表記はアルファベット。しかも、英語からの外来語が多い。パスはPASのといった具合で、かなり類推できます。店の看板は、マレー語と中国語表記で、商売をやっているのは大抵中国から渡ってきた人たちです。タイも同じですが、彼らは勤勉ですから、どうしても金持ち、高等教育も彼らに占められてしまう。そこで、マレーシア政府は、ブミプトラ政策という、公務員の採用、公立の学校入試等でのマレー人優遇政策をとっています。マレー人と中国人の融合はなかなか進まないようで、機会さえあれば、シンガポールのような都市国家が出現するのでは。東南アジアの華僑はとにかくパワーがあるし、金

に対する執着は日本人に勝るとも劣りませんね。気候・食物に恵まれ、気楽に毎日をごしたいタイ人やマレー人はかなわないと思いつつ、中国人の生活態度は受け入れがたいようです。

タイと比べて、一人当たりのGDPが二倍のマレーシアは豊かです。道路も整っているし、乞食も少ないですね。タイでは乞食は最底辺の職業であり、屋台や露店同様、手配師の傘下でショバをもらって営業しており、勝手にやれないそうです。また、旅行者だからといってふっかけて売ろうなこともしない。定価で商売をやっています。このようにいろいろ見聞し、ついでにボルネオ島サバ州のキナバル山（四一〇三m）に登ってきました。

十三、一月二〇日 日本人のアジア認識

タイ滞在も残すところ、一カ月半。これから東北部ウドンタニ県の農村に調査に入りますので、これが最終号となります。先日、生活教養学科経済・教養コースの学生、二十名の卒業論文が届き、目を通しました。私のゼミは「アジア社会と日本」というテーマで前期、東南アジア諸国の現状、日本の開発援助政策（ODA）の問題点、日本人のアジア認識等を概観して、後期は各自自由に研究し、レポートにまとめなさいというタイに来てしまったので、どうなることかと心配していたのですが、卒業単位がかかっているのでそれなりにまとめてありました。そこで得た感想を述べて、この通信を終えたいと思います。

日本人のアジア認識の貧困さ・偏りはつとに指摘されているところですが、現代の若者・学生も然りです。日本には世界中の情報が集められているにも拘らず、ことアジアは見えていません。外国といえば欧米であり、アカデミズムはもとより、欧米言語・文化崇拜が日本の特徴です。逆に、アジアは発展途上国であり、資源の供給先、開発援助により近代化を指導していくべき地域という認識が根強い。この図式は明治以来一貫しており、特にアジアに対する優越感は、一九七〇年以降日本企業の海外進出とともに強まり、最近の外国人労働者問題に対

する一般市民の意識に顕著に表れています。カタナイ・キツイ・キケンな仕事をするために不法滞在する、わけの分からない人たち。とりわけアジアの女性であればジャバゆきさん、不潔、エイズがコワイというイメージです。西欧人には家を貸してもアジア人お断わりとか、差別意識は現実化されています。また、アジアにおける日本の戦争責任の問題、若干の贖罪意識も、ODA供与により拭いさられたかの感があります。

このような状況で育った若者は、アジアの一員でありながら、アジアを異質化・差別化するのは無理からぬことでしょう。しかも、中学、高等学校の歴史教育にしても、受験の諸般の事情からアジア現代史をやるのは稀ですし、教師個人の戦後日本の歴史認識、文部省の見解との葛藤などで教えるにくい分野でもあります。

さらに、ジャーナリズム・マスコミのアジア理解、取り上げ方も一面的・部分的ですし、細切れの情報を総合化するのは難しい作業です。昨年論議を巻き起こしたNEXの「そして、チュちゃんは村を出た」は、家計を助けるためにバンコクに働きに出ようとした十四才の少女を中心にタイの児童労働を取材したドキュメンタリーでしたが、実はディレクターがブローカーに金を握らせ少女を村に返しており、やらせではなかったかと批判が出ました。現代の女工哀史に日本の視聴者は同情したとは思いますが、なぜ児童労働がタイで急速に増えているのかまで思いをいたした人は少ないのではないのでしょうか。NEX取材班はその背景を簡単に説明しており、そこがこの番組のもっとも肝心な所だったのです。ここの説明は正確でした。しかし、他のところでケチがついたために全体の信憑性を著しく低下させてしまったのが残念です。

農村で農作業を子供が手伝うのは当たり前です。しかし、子供が出稼ぎに行くのは最近の現象です。タイ国では、産業化の進展とともに中央と地方、都市と農村の所得格差が増大し、子供が住み込みで町で稼ぐのと、大人が出面で稼ぐ金額がほぼ同じです。日本企業のコマーシャルを巧みに利用した、耐久消費財（冷蔵庫・テレビ・車）と加工食品のセールスは、田舎でも現金を必要にしました。食べるものさえ作っていれば良かった時代は終わったのです。他方、バンコク周辺には、安い労働力を求めて外国企業が殺到し、工業団地造成・外国人向け高

級アパート建築ブームが生じてます。雇用力があるバンコクへ労働者の移動が起き、都市が膨張し、スラムが出来ます。また、タイ政府は軽工業を中心に産業化を進めたので、単純作業の需要が多いのです。そうすると大人より子供の方が安く使えるわけで児童労働の需要が生まれます。外国企業も現地の中小企業を安く下請けに使いますから、小規模の工場が利益を上げるには、コストダウンしかないのです。日本の製造メーカーの日本脱出はコストダウン、労働者不足解消が目的ですから、一般の基準以上に賃金を払いません。法定の最低賃金は一日当たり、百バーツ（五百円）です。

日本人が享受している経済的繁栄は、この格差を利用しているのです。企業の東南アジア進出だけではありません。私達が普段食べている食物の殆どが輸入品です。近年日本人のエビの消費量がのびてきましたが、日本で取れないブラックタイガーが加工されてあの値段で店頭に並んでいること自体不思議ではないでしょうか。日本のものであれば、卸値にもならないでしょう。その他の食料品、資源・材料、衣料品とか実に安い値段で日本に入ってきています。それにも拘らず物価が高いのは、日本の土地代が異常なためです。

確かに、このような格差を利用できる特権を得られたのは、戦後の日本人の努力の結果でしょう。しかし、それ以外に、朝鮮戦争・ベトナム戦争の特需がなければ、ここまでの発展はなかったはずです。歴史的にも経済的にも、アジアとの関わりを除いて日本の現在を考えるのは不可能です。パートナーはアメリカだけではありません。まず、この現実を理解し、次に今までの日本のあり方の妥当性を問う必要があります。

以上、アジアの現実を認識するのは難しい、それ抜きに日本の現状は理解できないと述べてきましたが、さて、自分の現実のなかで何をすればいいのか。そこで、前述した学生の卒論に戻るわけですが、やはり意識的に知ろうと努力してみても、とりあえず現実を直視する。今までのアジアに対する見方が変わり、日本で生活していることの意味が分かってきます。分かったうえで、どうするかという実践に関わる問題は、教育機関では一応保留にしておいて、何はともあれ学生の社会認識に役立つ情報を十分提供することが必要ではないかと思えます。今回

のレポートがそれに相当するとは到底言えませんが、学生諸君のアジアへの関心を喚起することが出来れば幸いです。